

さす事はやりて、鬼勝象之助、面に白粉をぬり、二枚櫛をさしけるよし、相撲大全に見ゆ、何のゆゑにまかせしと云に、其頃前づけと云手をとる事はやりけるが、彼等それをつたなき事とし、其手をとらざる證とて櫛をさしけるとぞ。

〔嬉遊笑覽容一下〕安永中、平賀源内、菅原櫛といへるを工夫し出しけるころ、或人狂歌を贈りけるに、酔て來て小間物見せの御手際は仕出しの櫛もはやる筈なり、返し、かゝるとき何とせん里のこ

ま物や伯樂もなし小づかひもなし、此櫛も瞬息の間のこと、見ゆ、今其形狀をまらす。

〔類聚雜要抄調二度〕長曆二年八月一日、法性寺座主教圓僧都參會關白相府、藤原語云、自所々御調

度等被施入法性寺書狀云、櫛巾、御篋一合、又御櫛篋納物之中在尼櫛、殿下仰云、去月十五日、於御堂聞此事、答不知之由、退尋見、誠有櫛巾篋、但體有故云々、中又仰尼櫛、是昔尼所指之櫛名也、皆

有其櫛樣并所指云々、

櫛用法

〔貞丈雜記人物二〕一女の髮にくしかうがいさす事いにしへはなし、古はよき女房衆は髮をわけてゆう事なし、髮をさげし也、今とてもさげ髮には櫛かうがいをさす事なし、古も同じ事なり、古もげす女は、髮を上げてつものぐるといふ事にするゆへ、かうがいをしてわけをかためし也、髪をくるとまきてかうがいなす故、かうがいがいはつのかきなり、されどもくしをばさ、ぬなり、髮に依之つものぐると云ふ、かうがいも昔のは甚みじかきなり、

くしさす事はいむ事也、

〔源氏物語六未摘花〕すみのまばかりにぞいとさむげなる女房、まろき衣のいひまらす、けたるにきたなげなるまびら、ひきゆひつけたる腰つき、かたくなしげなり、さすがにくしをしたれて、さしたるひたいつき、ないけうばう、ないしどころの程に、かゝるものどもあるはやおかし、

〔大鏡三一條〕つぎのみかど、三條院のみかどと申き、中院にならせ給ひて御目を御らんせざりし

こそいといみじかりし、ことに人の見たてまつるには、いさゝかかはらせ給ふ事おはしまさ